

第3回 「泉大津市オリアム随筆賞」

【佳作】

おさるのちよつき

後藤靖子・東京都

机の上にちよこんと座ったおさるのぬいぐるみ。昨日まで着ていたボロボロの服はどこへやったのでしょうか。何だか少し照れくさそうに黄色いちよつきを着ています。

おさるをそっと手に抱くと、ちよつきのポケットの中に小さな紙切れを見つけました。私は首をかしげ、ゆっくりとそれを広げます。「やすこへ。いつもさみしい思いをさせてごめんね。お母さんより。」

これは、私が十歳の時の話です。私の両親は小さな洋食店を経営していました。お店は忙しく、両親は毎晩遅くまで働いていたので、私は一人で留守番をすることがほとんどでした。

一人で寝るのが寂しくないようにと、買ってもらったのが大きなおさるのぬいぐるみです。そばかすがあって愛嬌たっぷり。私はすぐにそれを気に入り、毎晩抱いて眠りました。雷が鳴る夜も、パトカーのサイレンが騒がしい夜も、これがあればへっちゃらです。

毎日一緒に過ごしているうちに、おさるが着ていた赤いシャツはだんだん汚れていき、穴が開いたり破れたり……。それでも私は、おさるを離しませんでした。

そんなある日のこと、学校から保護者宛の手紙を渡されました。親子遠足のお知らせです。

忙しい両親が参加できないことはわかっていました。去年もおとしも、友達の家族や担任の先生とお弁当を食べた寂しい思い出があります。今年もその時期がやってきたのかと、私は大きなため息をつきました。

母に手紙を渡したところで返事は決まっています。私はビリビリと手紙を破り、くずかごへ放り込みました。

「早く、この日が過ぎますように……。」

翌朝、ハンカチを出そうと引き出しを開けてはとしました。昨日破いて捨てたはずの手紙がテープで補修され、引き出しの中にあつたのです。

(どうしよう、お母さんに怒られる)

私はドキドキしながらランドセルを背負い、「いってきます」も言わずに玄関の扉を開けました。

「いってらっしゃい。」

隣の部屋から母の小さな声が聞こえます。それ以上、母は何も言いませんでした。

親子遠足の朝、お弁当を作ってくれたのは母でした。料理人の父とは違って、あまり料理が得意ではなさそうです。お弁当の中身は私の好きなハンバーグにウインナー。焦げた玉子焼きは甘くてちよっぴり苦い味がしました。

「ただいま。」

遠足から帰ると、家の中はいつもと変わらずしんとしています。一人ぼっちの私を待っていてくれたのは、お気に入りのおさるのぬいぐるみでした。

でもその日のおさるは、何だかいつもと違います。ボロボロの服を脱ぎ、毛糸で編んだ黄色いちよつきを着ていました。新しい服に着替え、なんだか照れているようにも、申し訳なさそうにも見えます。

おさるが着ているかわいいちよつきは、小さい頃母が私に編んでくれたものでした。きつと今まで大切にしまっていたのでしょうか。タンスに入れる防虫剤の匂いがしました。

おさるをそっと手に抱くと、ちよっきのポケットの中に小さな紙切れを見つけました。私は首をかしげ、ゆっくりとそれを広げます。

我慢していた思いが、涙になってどつとあふれ出しました。

「やすこへ。いつもさみしい思いをさせてごめんね。お母さんより。」

あの日、母はどんな思いで破れた手紙を読んだのでしょうか。あれから三十年が経ち、母親になった今、ぼんやりとそんなことを考えます。寂しさを抱えていたのは私だけではなかったのかも知れません。

母の愛情も、寂しい気持ちもみんな知ってる黄色いちよつき。今はおさるではなく、私の娘が着ています。洗濯で失敗して前より少し小さくなってしまったけれど、それでもまだ捨てられません。

「おかさん。ばあばのおはかまいりに、ちよっちきていきたい。」

三歳の娘が口をとがらせながら私に言います。「ちよっちじゃなくて、ちよつきでしょ。」私の言葉に、ほっぺたを風船のようにふくらませる娘。

それでも黄色いちよつきを出してあげると、嬉しそうに袖をとおして私にピースサインをしてみせました。